

新開発教材におけるタスク作成 (3)

一初級後期のトータル・タスクー

新谷あゆり 藤牧喜久子

要 旨

新開発教材の中でのタスクとは、それぞれの課で学んだこと(構造練習・会話練習)とそれ以前の課で学んだことを含めた総合練習で、実生活へのリハーサルと言えるものであろう。今回この論文で取り上げるのは、我々がトータル・タスクと呼ぶものである。トータル・タスクとは、小さなタスクが結び付いたもので、一つの目標に向かって行われる大規模なタスクのことである。以下、新開発教材におけるトータル・タスクのねらいと具体例を示し、それをもとに今後の展望を述べたい。

【キーワード】 内容優先 トータル・タスク

1. 「NSF」の中のタスク

1. 1. タスクの構成要素

タスクの構成要素については従来から様々な見方があるが、それらの中で共通項目としてはインプット、目的、活動の3項目が挙げられる。以下、それらの項目と、その望ましいあり方について述べる。インプットについて Nunan (1989) は、バーバルなものもノンバーバルなものも、つまり日常生活の中で学習者に身近なものは何でもインプットになり得るとしているが、岡崎 (1990) は、性質の上からこれを情報上のインプットと言語上のインプットに分けている。また、Krashen (1981) は、「i+1」のインプット、つまり学習者の理解できる範囲よりほんの少し高いレベルのインプットが習得には最も効果的であるという説を出している。これは、Breen & Candlin がよいタスクの条件としてあげている『学習者の能力で十分成し得る部分』と『学習者の能力では不十分で協力したり総合したりして能力の不足を補う必要のある部分』の両者のバランスがとれていること¹⁾と同じようなことであると考えられるが、このような性質を持つことが、インプットには必要になってくるであろう。

目的については Nunan (1989) は「ひとつとはかぎらない」²⁾と述べ、またそれらは「互いに排反しない」ものとしている。基本的な目的のカテゴリーとしては、岡崎 (1990) が「言語(学習)上、(言語)学習上、インプットの処理とインターアクション上、教室外のコミュニケーション上、異文化間コミュニケーション上」³⁾をあげているように様々なものが考えられるが、これらの中には、それぞれのタスクのタイプなどによって達成されないものももちろんあると思われる。

活動については、Nunan (1989) は「インプットデータを使って実際に活動するもので、実社会での生活のリハーサルとなり、様々な技能を使って学習者のなめらかさの能力を高めるものである」⁴⁾と定義して、さらにその活動は「それまでに学んだこととの関連、あるいはそれに立脚した理解をもとにした活動から、プロダクションあるいは分析を伴う活動は発展させていく (task continuity)」⁵⁾ことが望ましいと、タスクにおける連続性の重要性を強調している。同時に活動は、それを行う学習者の動機付けが高いものでなければならないし、学習者全員が参加できるものであること、また学習者間で何らかのインターアクションを伴うものであることが必要である。

以上がタスク3つの構成要素とその望ましいあり方であるが、これらの点は、新開発教材（ここでは『New Situational Functional Japanese』で扱ったタスク、以下『NSF』とする）のタスク、とくに第3巻のタスクの中で、どのように考慮されているのかについて以下に考えていきたいと思う。

1. 2. 『NSF』の中のタスクの意味

『NSF』の中でのタスクの位置付けを考えるために、まず『NSF』での各課の構成を見てみると次のようになる。()内は『NSF』で使用されている名称を示す。

1. モデル会話 (Model Conversation)
- ↓
2. レポート文 (Report)
- ↓
3. モデル会話・報告文の語彙表 (New Words and Expressions)
- ↓
4. 文法ノート (Grammar Notes)
- ↓
5. 会話ノート (Conversation Notes)
- ↓
6. 練習の語彙表 (New Words in Drills)
- ↓
7. 構造練習 (Structure Drills)
- ↓
8. 会話練習 (Conversation Drills)
- ↓
9. タスク (Tasks and Activities)

『NSF』は、構造、状況、機能を重視している教科書である。とくにこの教科書の特徴は会話ノートとその練習を行う会話練習にあり、それらは『NSF』の中で重要な位置を占めている。『NSF』の中では、その課での学習項目および会話ノートや会話練習で扱われている状況設定が、各課の最

初にあるモデル会話で、まず示されている。したがって、このモデル会話の状況で行われる会話の構造的な側面からの練習を「構造練習」で行なった後、モデル会話をもとにコミュニケーション場面に近付けた練習を「会話練習」で行うというのが、『NSF』の中での流れである。Brumfit (1984) は、正確さとなめらかさは互いに相反するものではなく、相互補完的なものであると述べているが、『NSF』の中での会話ノート・会話練習と文法ノート・構造練習の関係はこれに近いものであると考えられる。

各課の最後の部分、つまり上に述べた構造練習と会話練習を終わったあとに位置するタスクでは、その課あるいはそれまでの課で学んだことも含めて、モデル会話、会話ノートや会話練習で設定された場面、あるいは他の実社会により近い場面でのコミュニケーションに近づけた練習、つまり Nunan (1989) のことばを借りれば、「実社会での生活へのリハーサル」をすることになる。このように実社会での生活へのリハーサルという、タスクにおいては会話ノートのストラテジーがより重視されがちになるように考えられるが、『NSF』の中では、ストラテジーの練習のためには文法ノートで扱った文法項目が必要であるために、タスクにおいては会話に劣らず文法事項も重視されることになる。このように、各課で学んだことおよびそれまでの課で学んだことをもとに、それを会話ノートや会話練習で設定された場面やまったく別の場面で応用することにより、情報上あるいは言語上のインプットいわゆる「i+1」に近づけることも可能になる。また活動の面では、それまでの学習項目やストラテジーを踏まえた上でタスク練習に入るということから、Nunan (1989) の唱えるタスクへの連続性 (task continuity) が考慮されていることになる。

以上のような各課の中でのタスクへの連続性やそれぞれの課の間の連続性の他に、第3巻の場合は『NSF』の最終段階であるということから、『NSF』終了後の次の段階への連続性、つまり中級への橋渡しの役割のタスクも必要となってくると考えられる。『NSF』が大学や大学院の学生を対象としていることから、インプットとしてグラフや表、またその解説、あるいは社会的テーマを扱った比較的長い読み物を用意し、学習者が報告したり意見を述べたり、また学習者どうしで自由な話し合いができるような機会を第1・2巻より多く取り入れる努力もされている。

また、Nunan (1989) がタスクの活動について「各タスクは問題が進むにしたがって、インプットや活動などが難しくなっていくという、易から難へというだけの関係でつながっているのではなく、テーマや学習方法が理論的につながっていなければならない」⁶⁾と指摘しているように一つの課の中での各タスクの練習がテーマが統一されているという点もタスクの連続性をより明確にし、学習者により高い動機付けを与えるための一つの方法として考慮に入れてもよいと考えられる。この点については次にさらに詳しく述べることにする。

以上が『NSF』におけるタスクの位置付けであるが、このように『NSF』における各課のタスクは、文法ノートと構造練習および会話ノートと会話練習を踏まえ、それまでの課で学んだ学習項目をも含んだ総合的な練習で、実生活へのリハーサルともいえるものであろう。

2. トータル・タスクについて

2. 1. トータル・タスクとは何か

留学生センターの予備教育の教室活動の中で、従来タスクの時間といえば、その課の学習項目を盛り込んだ会話テープを聞き、必要な情報を聞き取らせるという小規模な聞き練習がほとんどであった。しかし、『NSF』の作成にあたって、タスク (Tasks & Activities) には、小規模なタスクだけではなく、トータル・タスク (ここでは大規模なタスクをトータル・タスクと呼ぶことにする) を取り入れてみることにした。トータル・タスクとは、ある目標に向かって行われる活動全体を一つの大きなタスクとして考えるものである。そしてその大きなタスクは、小さなタスクが有機的に結び付いて構成されている⁷⁾。

なぜトータル・タスクが必要なのか、トータル・タスクのねらいは何であるのかについて、以下で述べていきたい。

2. 2. 現実の世界と教室内での活動

現実の世界における活動を考えてみると、それぞれの活動には目的があるといってもよい。例えば、「レポートを書く」という活動を取り上げて考えてみよう。この活動には、「レポートを書きあげる」という目標がある。レポートを書く人は、その最終目標に向かって必要な作業を段階を踏んで行っていく。まず、「テーマを決める」ということがある。それから、「先行論文を読む」→「テーマへの新しい視点を持つ」→「調査する (文献を読む、フィールドワークをする)」→「まとめる」→「他人の批判を受ける」→「修正する」→「書く」という作業が行われる。これらの作業は、どれもが目標に向かって欠くことのできないものであり、一つ一つが、内容的にも、思想的にも、技能的にも (読む・書く・話す・聞く) にも有機的に結び付いているといえる。現実の世界のタスクとは、このように、ある目標に向かって行われる意味ある作業の連動体のことをいうのであろう。

それに対して、教室の中での活動はどうであろうか。学習者の多様性、さらに空間的・時間的制約——例えば、留学生センターの予備教育では、タスクは5～10人の規模で2日に1コマ75分で1課分を完結しなければならない——などを考えると、これまで教室内活動としてのタスクの多くは、連続性のない規模の小さなものになりがちだった。事実、『NSF』でも第1・2巻では聞き練習を中心に、内容的にも、作業・技能的にも相互に関連のない小タスクを1課につき3～5問課している。これを75分でこなすのであるから、学習者は、数分から十数分ごとにまったく違うタスクを前に気分を新たに取り組むことになる。個々のタスクはそれぞれバラバラに独立しているから、多様性および機動性にすぐれているし、あるタスクには興味をもてなくても別のタスクには興味ももてるという意味で、学習者の興味を平均してひくことができるかもしれない。しかし一方、一つのタスクから次のタスクへの内容の予測ができないために、新たなタスクによって提出された状況を理解するのに学習者が手間取ったり、タスクとタスクの間の活動が寸断される場面も出てくる。

このような欠点を克服するために、タスクをトータルなものとしてとらえようという考え方が生

まれてくるのも当然であろう。タスクを一つの大きな流れを持った活動全体としてとらえ、教室内の活動を実生活へのリハーサルにしたいという思いが、トータル・タスクの【NSF】への導入につながったのである。

2. 3. トータル・タスクのねらい

トータル・タスクには、いくつかのねらいがあるが、それは大きく四つに分けられる。

a. 動機、意味、必要性がある

トータル・タスクは、小さなタスクが、内容的にも作業的にも有機的に結び付いている。それゆえに、「今行ったタスクは、次のタスクへとつながっている」という、タスクを行う動機がそこから生まれてくる。また学習者は、「少し前に行った活動は、今行っているこの活動のこの部分に関連していたんだ。必要だから行ったんだ」という、タスクを行う意味、必要性がわかってくる。このように、従来のタスクにおいて希薄であったタスクを行う動機、意味、必要性が、トータル・タスクにおいては重要な要素として組み込まれているのである。

b. 活動の流れがある

学習者は、活動の流れがあることで、一つ一つの活動の状況が理解しやすくなり、自分が何に向かって何を行えばいいかが、把握しやすくなる。学習者は、自分の「日本語力」の不足している部分を活動の流れで補うことによって、内容を予測し、理解力を促進させることができる。また、学習者は、日本語を一連の流れ、状況、コンテキストの中で使うので、どのような時どのような構造・語彙をどのような機能をもって使えばいいのかが理解しやすくなる。予備教育での言語練習の主な方法の一つであるパターン練習（コンテキストから切り離して行う文型代入練習）が持つ弱点をここで補うことができるのである。

c. 四技能を自然な形で連動させる

従来の小タスクは、単独の聞きタスクか読みタスクなどのレセプティブなものがほとんどであった。そしてその多くが、聞き取る（読み取る）べき内容について、正しいものを記号で選ぶか、単語レベルで書き込ませることでタスクを終了させる形を取っていた。それゆえに、学習者の日本語のプロダクションに結びつくものは（取り扱った内容についてみんなで話しましょう、書いてみましょう、的なオープンなもの以外は）ほとんどなかった。

しかし、トータル・タスクでは、あるテーマについて、学習者が自分達の国のことを話したり、日本のことを予測したりしてから、テープや読み物をインプットとして聞き、読み、その内容について各グループが報告する、ディスカッションするなど、さまざまな形のプロダクティブなタスクを組み合わせることができる。そしてそのことによって四技能を自然なかたちで連動させることが

できるのである。

d. 大人の知的作業として考える

言語的側面に焦点をあてた「言語」の練習のための教室活動では、学習課題は、初級レベルの学習者の日本語力では幼稚なものにならざるをえない⁸⁾。しかし、タスクの課題やテーマを知的なものに設定し、それを達成するために必要な作業を日本語を使いながら行うことを学習課題と考えれば、タスクは大人の知的作業になりうるのではないだろうか。そのような意味からトータル・タスクでは、文化・社会的なテーマを設定し、それを考察することを学習課題としている。そうした知的学習課題を達成するには、一つの小規模なタスクでは無理がある。その点トータル・タスクは、数種の小タスクの連動体であるので、知的課題を達成するために必要な作業を日本語で一步一步段階を踏んで組み立てながら行うことができる。小タスクの課題を知的にも作業的にも一つずつ達成していくことによって、トータル・タスクの内容を質的に低次なものから高次なものへと高めていくことができ、最終的に、大人が知的に満足するタスクにしていける可能性を持っているといえる。

2. 4. 内容を優先する教室活動

以上のようなねらいをもったトータル・タスクの最も基本となる要素、考え方は何であろうか。

それは、トータル・タスクを一つのテーマ、内容でつらぬくということだろう。そもそも実生活のコミュニケーションでは、「言語」そのものを伝えるのではなく、意味、内容を伝えるのが原則である。そのことを考えると、教室内においても、「学習者の意識がことばそのものについての学習ではなく、活動の内容に向けられた内容優先の活動であること」⁹⁾が、重要な要素となるのではないだろうか。

それでは、内容、テーマに注目して活動することによって、どのような学習効果があると考えられるだろうか。以下、四つに分けて述べてみたいと思う。

a. 「言語力」以外の能力が発揮できる

留学生センターの学習者は、成人であり、「言語力」以外のさまざまな能力を持っている。しかし、教室の中ではその能力が発揮できずにいるといえるであろう。「言語」的な課題を優先する活動では、学習者は幼稚な欠陥だらけの能力の低い存在でしかない。それに対して、内容を優先する活動では、内容的な課題を設定することによって、学習者を「言語能力」の低い幼稚な存在としてではなく、社会的な常識、能力をそなえた一人の大人として考え、その能力を活用しようとする。内容を優先するタスクでは、学習者は言語知識のみに頼るのではなく、その他の社会的な常識、体験、考察、思考能力などの能力を総動員して課題を達成しようとするだろう。言語的知識の不足をそれらの能力で補うことによって、理解の幅を広げていくという効果があると考えられるのである。

b. 言語学習への動機を高める

内容を優先する教室活動において、成人の学習者は、内容の知的レベルをおとさずにコミュニケーションしたいと考えるであろう。そしてタスクの内容は学習者の知的興味・レベルに合わせて設定するので、学習者は、タスクを達成するためには自分の持っている日本語の能力では不十分であることを認識するであろう。このように、内容的レベルをおとさずに話したい、伝えたい、わかってほしいという大人としての欲求が、そのために必要な語彙や文法を身につけるといふ動機につながっていくのである。内容に注目して活動することが、イコール語彙や文法を無視することになるのではなく、言語学習における「言語」の側面の学習の動機につながっていくのである。

c. 内容的な興味・関心にひきつけて言語学習ができる

予備教育の通常の教室活動は、文法項目に焦点をあてた（コンテキストから切り離れた）パターン練習と場面が与えられた対話形式の文レベルでの代入練習やロールプレイが主なものである。実質5ヶ月余りの集中コースで「あいうえお」から学ぶ学生に、一応留学生活に困らないだけの語学力をつけ、簡単な専門書を読むまでまでつけさせようというのであるから、そこで学習者に課せられる語彙や文法項目の負担は少くない。現状では、1日に覚えるべき新しい語彙は30個、文法項目は5項目という見当になる。これらの語彙や文法をどのように記憶し、使用し、身につけていくかは、学習者にとって大きな問題である。教師や教科書が提出した順にただ暗記したり、単語集や辞書がむしゃらに頭につめ込もうとしても、味気ない上に効果も悪い。他に方法はないものだろうか。

内容を優先する活動においては、学習者が内容に興味や関心を持つことによって、とくに興味や関心のあることばを覚えてしまうということがおこる。例えば、学習者の専門が医学であったとしよう。彼らにとっては、「つくえ」「いす」などという語彙よりも、「薬」「病院」「病気」「医者」「患者」「医学」「症状」「治療」などという語彙の方が必要であり、そのような語彙が使われるトピックを選んでタスクに組めば、関心も高く、実際に覚えて使ってしまうだろう。つまり、自分の関心・興味に直接結びつけやすいことばから学習するということが自然と行われるのである。

内容を優先する活動では、学習者の興味を持ってそうなテーマを選択し、課題を設定することによって、学習者が自らの興味や関心に引きつけて語彙や文法を自然と覚えてしまうという機会を提供することができるといえるであろう。

d. 日本の文化・社会の考察をも含めた日本語学習

内容を優先する活動においては、タスクの課題を日本の文化や社会に焦点をあてて設定することができる。つまり、日本語学習を、日本の文化的、社会的側面の考察をも含めたものとして考えることができるのである。その場合、学習者は、一人一人が母国文化の担い手として日本文化を複眼的に見るための情報をクラスに提供することができる立場にいる¹⁰⁾。学習者は、一方的に教師に

よって情報を与えられる受身的存在としてではなく、母国文化のインプット役として活動に主体的に参加することができる。ここでは、学習者が主体的に活動に取り組みながら、日本の文化、社会への興味を広げ、その内実を深く観察していくことも、日本語学習の一部として取り込まれ、遂行されていくのである。

3. トータル・タスクの具体例

ここではトータル・タスクとして作成した二つの課のタスクについて、具体的に説明することにする。

3. 1. 第18課の「日本の大学生と電話」タスクの場合

トータル・タスクのテーマを選ぶ際に、考慮したことは三つある。

- 1 日本の生活、文化、社会を観察できるもの
- 2 その課の会話ドリルの中心テーマと関連しているもの
- 3 成人の学習者が知的興味を持てるもの

である。

第18課の会話ドリルの中心テーマは、「電話で伝言する」であった。教師としては、電話に関する資料、統計、アンケート調査類などを集め、そこからトピックとして知的興味を持つようなものを選び、資料（インプット）として提示し、タスクとして組んだ。【NSF】において初めて提示されるトータル・タスクということもあって、少し短めの40分から50分ぐらいで達成できるものにした。以下、その概要を説明する。

①タスクの課題

日本人の大学生が電話をどのように利用しているかについて、資料を読み、予想と結果を比較し、意見を述べる。

②学習項目

	機能	構造
話す	予想する 理由を言う 報告する 比較する	～と思います ～からだと思います
読む	意見を言う グラフ（円・棒） を読み取る 資料を読んで 大意を理解する	～と思っていましたが、実際は～です 私の国は～ですが、日本の大学生は～です

③活動の形態

全体→グループ→全体

④活動の流れ

a 導入・動機付け…学習者の知識や問題意識や興味を掘り起こす。

学習者同志が、国で電話をどのように利用していたかを話し合う（自分たちの持っている情報を他の人たちに提供する）。日本人の大学生はどうか、予想してみる。

L18-73

3. あなたと電話 あなた 電話

1. あなたは国で一週間に何回ぐらい電話していましたか。
くに しゅうかん なんかい 電話

()

2. 一回に平均（へいきん:average）何分ぐらいでしたか。
かい へいきん なんぷん

()

3. どんな人と電話で話しましたか。（ex. 友だち）
ひと 電話 はな ともだち

()

4. どんな話題（わだい:topic）でしたか。

()

4. 日本の大学生と電話 にほん だいがくせい 電話

1. 日本の大学生は一週間に何回ぐらい電話すると思いますか。
にほん だいがくせい しゅうかん なんかい 電話 おも

()

2. 一回に平均（へいきん:average）何分だと思いますか。
かい へいきん なんぷん おも

()

3. どんな人と電話で話していると思いますか。
ひと 電話 はな おも

()

4. どんな話題（わだい:topic）だと思いますか。
わだい おも

()

b 調べる…実際に調べてみる。

クラスを二つのグループに分けて、日本人の大学生の電話利用についての別々の資料（既存のアンケート調査）を読み、大意を取る（インフォメーションギャップを作る。AグループよりBグループの方が難しくなっているのので、そのことを考えてグループ分けをする）。結果記入欄に、結果を書き込めたかどうかで、内容が理解できているかどうかを確認する。

5. クラスをふたつのグループ（AとB）に分けて、資料（しりょう:data）を見てみよう。

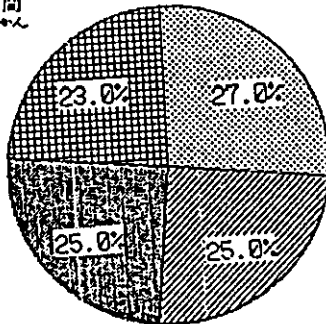
NTT調査（ちょうさ:survey） 1988年2月
大学の学生500人（男250 女250）に聞く

Aグループ

1. 電話の回数

まず一週間に何回電話をかけるか聞きました。一番人数が多いのが「5回」で、16%でした。次が「9～10回」（15%）で、それから「3回」（13%）、「7回」（11%）の順（じゅん:order）でした。平均（へいきん:average）は、8.4回です。

2. 一回に電話する時間



- 0-10分
- 11-20分
- 21-30分
- 31分以上

一番多いのが、「10分以内」で、27%でした。次が「21～30分」（25%）「11～20分」（25%）でした。また、「31分以上」の人も23%いました。平均は28分です。
長電話の平均は、166分です。一番多いのが、「61～120分」で26%、次が「121～180分」（24%）で、「60分以内」（21%）と続きます。
「5時間以上」話した人も10%いました。一番長く話した人は、12時間話しました。

結果（けっか:result）

日本の大学生は、一週間に平均（ ）回電話をします。

一回に平均（ ）分電話をします。

長電話の平均は、（ ）分です。

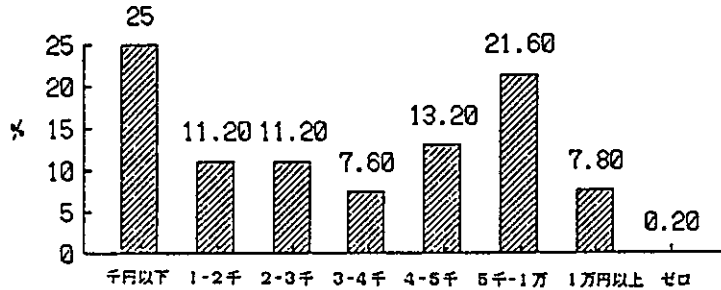
Bグループ

3. 電話の相手 (あいて: a companion)

電話をかける相手は、「同性 (どうせい: one's own sex) の友だち」が二番多くて、9.5%です。次が「異性 (いせい: one's opposite sex) の友だち」で、7.6%です。そして「家族 (かぞく: family)」(5.5%)、「親戚 (しんせき: relatives)」(1.4%)と続きます。

4. 一ヶ月の電話代

一ヶ月の電話代



一ヶ月の電話代は平均4990円です。「千円以下」が25%で、トップです。しかし「5千~1万円」払う人も22%もいます。電話を使う人と使わない人の差 (さ: difference) が大きいことが分かります。一番多く払った人は、3万円払いました。大学生の一ヶ月の本代は、平均2765円ですから、一ヶ月の電話代は、本代の約 (やく: approximately) 2倍 (にばい: 2 times) です。また大学生の一ヶ月のアルバイト代は、平均47000円ですから、その10%は、電話代になります。

結果 (けっか: result)

日本の大学生が、電話をかける相手は () が多いです。
 次は、 () で、家族は3番目です。
 それから 一ヶ月の電話代は、平均 () 円) です。
 大学生の一ヶ月の本代の (約) 倍) です。

c 結果を報告する

AグループはBグループに、BグループはAグループに結果を報告する。

6. 結果を発表しよう。Let's report the results.

d 予想と結果を比較し、意見を述べる

a の予想と c の結果を比較して、自分の意見を述べる。このことによって、タスクを達成したこととする。また、各国と比較することで、日本文化を複眼的に見る作業も行う。

7. クラスで話してみよう。

1. 日本人の学生が一週間に電話をかける回数や一回の平均時間は長いと
思いますか。
(_____ と思います。)

2. この結果とあなたの予想(よそう:estimate)をくらべてみましょう。
(_____ と思っていましたが、実際(じっさい:fact)は _____ です。)
例 電話代はもっと少ないと思っていましたが、実際は多かったです。

3. あなたの国とくらべてどうですか。
(私の国は、 _____ ですが、日本の大学生は、 _____ です。)

4. なぜ、あなたの国と日本はちがうのでしょうか。
(_____ からだと思います。)

3. 2. 第20課の「旅行」タスクの場合

①テーマとして旅行を選んだ理由

第20課のタスクの統一テーマとして旅行を選んだ(資料1)。旅行についてはほとんどの学習者が日本滞在中に旅行してみたいと考えているようであるし、またすでに旅行した経験を持っている学習者もいるので、学習者にとって興味がある話題であると考えられる。

また、この課のタスクの問題の2で、とくに東京を取り上げた理由は、東京についてはほとんどの学習者が何らかの情報を持っていることや、東京に行ってみたいと思っている学習者が多いという点あげられる。とくに筑波大学の場合、東京に興味を持っていたり、行きたいと考えている学習者がほとんどであるということから、適当な場所であろうと思われたからである。

また、このタスクを東京在住の学習者が行う場合、すでに知っている地名が扱われていることから問題には取りかかりやすいであろうし、旅行計画を人にアドバイスするつもりで立てることにすれば、不自然にはならないのではなかろうかと考えた。

②タスクの課題

- 問題1 旅行について経験を話す。
 問題2 東京についての情報を集め、旅行の計画をたてる。
 問題3、4 グラフや文章から、日本の旅行事情や日本人の今後の旅行に対する考え方を知る。

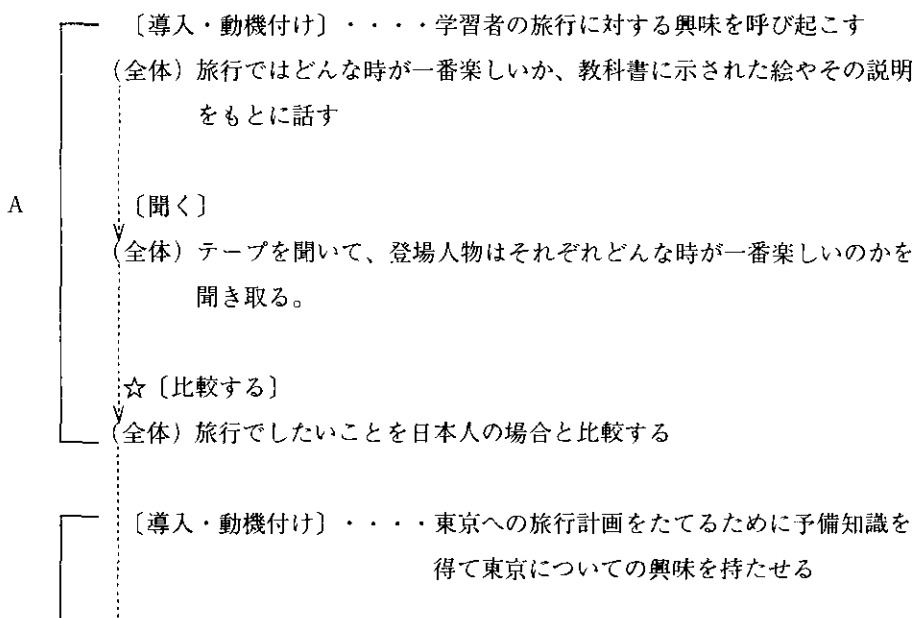
③学習目標

	機能	構造
話す	経験をいう 順序をいう	～時、～ / ～ことがある まず～、次に～、それから～、 最後に～
聞く	☆意見を述べる 人の経験を聞く 旅行についての意見を聞く 順序を聞く	～て、～/～てから、～ (→日本人の旅行費用) ～ことがある ～時 まず～、次に～、それから～、 最後に～

④活動の形態

全体 → 全体 → 個人 → 全体 → 全体 → ☆個人 → ☆グループ
 (グループ) (グループ) (グループ) (ペア)
 問1 1.2.3. 問2 1.2.3. 問2 4. 問2 4. 問3 1. 問3 2. 問4
 (フィードバック)

⑤活動の流れ



(全体) 学習者どうして東京へ行った時の経験を話し合う。経験がない場合は、行ったことがある学習者、あるいは教師から東京についての情報を得る。

〔聞く〕

(全体) テープの登場人物の経験談を聞くことにより、東京の地名について慣れ、また、それぞれの場所についての情報も得る。東京の観光ポイントのまわり方についてのアドバイスをテープで聞くことによって、順序の言い方についての復習をし、それぞれの場所やそのまわり方、ホテルの値段などの情報を得る。

B

〔計画を立てる〕

(個人) これまでに得た情報をもとに、学習者一人一人、あるいはグループで東京への1泊2日の旅行計画を立てる。計画ではどのようにまわるかというコース設定と、交通機関を決め、ホテルの宿泊費は、いくらぐらいにするかということも決める。

〔計画を批評し合う〕

(全体) それぞれが考えた計画を発表し合い、それについての意見を述べる。

〔調べる〕

(全体) グラフを見て、日本人の家族が1年間に使った旅行のための交通費と宿泊費の推移を調べる。

C

☆〔意見を述べる〕

(個人) 日本人の旅行費用(交通費と宿泊費)について、日本人の年取と考え合わせて意見を述べる。

〔文章からグラフを完成する〕

(グループ) ペアあるいは四人のグループでそれぞれに割り当てられた文章を読み、情報を交換し合ってグラフを完成し、日本人が今後どのような旅行をしたいと考えているのかを知る。

D

⑥活動の融通性について

上の③から⑤の中に☆とあるのは、☆にあたる問題が難易度の高いタスクなので、まったく初級の学習者はやらなくてもさしつかえがなく、時間的に余裕のある学習者、既習の学習者に向けてのものである。活動の形態は、クラスの人数によりクラス全体で行うと指定してあるものもグループあるいはペアワークにしてもよいという意味で、()の中に変更可能な形態を示しておいた。たとえば問題1の1や問題2の1は、クラスの人数が多い場合、クラス全体ではなくグループに分かれて経験を話すことによって、学習者一人一人の話す機会を多くしてもよいし、問題2の3は、一人では難しいと考えられる学習者に対してはペアにして一人はコースをもう一人はホテルの宿泊費を聞き取らせるといったかたちにしてもよい。

学習活動の流れは前ページに示したとおりである。A、B、C、Dはそれぞれ問題1、2、3、4にあたる。Aの中でも〔導入、動機付け〕〔聞く〕〔比較する〕という手順を踏んでいるが、Aで旅行に興味を持つことによってBの旅行計画へと進んでいけるように、第20課全体のタスクの中ではAはBの導入の役割を果たしている。またBの〔聞く〕でホテルの宿泊費を知ったり、〔計画〕で学習者が宿泊費について考えてみることによって、Cの旅行費用についての関心を高めさせるというように、Bの中にはCへの導入となる要素が含まれている。さらにDは、A、B、Cで考えてきた“旅行”というトピックについて、日本人は今後どのようにしていきたいと考えているのかを知る難易度の高いタスクであるが、グラフを読み取るCのタスクと合わせて、中級への橋渡しの読物タスクとなっている。

このように第20課は旅行というテーマで統一されたタスクであるが、その中のBの部分は東京への旅行計画を立てるというものになっており、Bだけでも一つのまとまった流れがある。同様にCもBが導入の役割を果たしているが、Cの中だけのまとまった流れもある。したがって、タスクを行う場合には学習者のレベルを興味などに合わせていくつかの小タスクを選択して行ってもよい。

4. 問題と展望

【NSF】におけるトータルタスクの抱える問題はいくつかあると思う。それは教科書という性質上、タスクのテーマ・目標・手順が、教師により始めから決められていて、学習者が選べないということである。このことから、

1. 学習者がタスクのテーマに興味を持ってない
2. タスクが、ある学習者には難しすぎる、やさしすぎる

などの問題が出てくる。これらの当面の対処方法としては、テーマに学習者が興味を持っていない場合には、教師が学習者に興味を持たせるための動機付けの作業を行うことである。例えば、ビデオ・テープ・写真などを使って、そのテーマについての問題意識をかりたてる、あるいはテーマについて各国ではどうかについて考えてこられるような教材（新聞の切抜き・アンケート調査・質問シー

ト)などを前もって与えておく、などである。2については、一人では無理だがグループで協力すれば解決できるものであれば、グループワークの形式を取る、各グループに、同じ課題ではなく学習レベルにあった異なった課題を与えるなど、教師が臨機応変に対処することが必要であろう。

より根本的な解決方法としては、タスクのテーマをいくつか用意しておき、その中から学習者が選ぶ、あるいはリソースブック的なものを作成し、学習者がそれを活用するということになるだろう。しかし現実的には、その作業は『NSF』全3巻作成と同じだけの労力を必要とするだろうことを考えると、とりあえずは、現状の『NSF』の枠内で教師が『NSF』のタスクを素材として手直ししながら、学習者の状況を見て、そのつど柔軟に対応をしていくことが望ましいであろう。

注

- 1) 岡崎敏雄、岡崎暉 (1990) p. 164
- 2) Nunan, D. (1989) p. 49
- 3) 岡崎 (1990) p. 83
- 4) Nunan (1989) p. 59
- 5) 同上書、p. 130
- 6) 同上書、p. 119
- 7) 石井恵理子 p. 11
- 8) 同上論文、p. 8
- 9) 岡崎敏雄、岡崎暉 p. 133
- 10) 同上書、p. 202, p. 211

参考文献

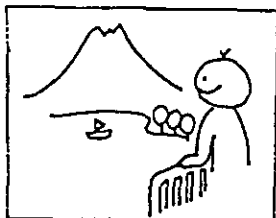
- 1) 石井恵理子 (1989)「学習のとらえ方と教室活動」『日本語教育論集』6 国立国語研究所日本語教育センター
- 2) 市川保子・小林典子・戸村佳代 (1990)「新教科書における文法シラバスーその作成過程と現状について」『日本語教育論集』第5号 筑波大学留学生教育センター
- 3) 岡崎敏雄・岡崎暉 (1990)『日本語教育におけるコミュニカティブ・アプローチ』凡人社
- 4) 岡崎敏雄 (1991)「コミュニカティブ・アプローチ」『日本語教育』73号 日本語教育学会
- 5) バルダン田中幸子他 (1988)『プロジェクト・ワーク』凡人社
- 6) バルダン田中幸子他 (1989)『ロールプレイとシミュレーション』凡人社
- 7) 松畑熙一 (1989)「文法のコミュニケーション化」『英語教育』No. 8 大修館書店
- 8) 渡辺恵子・西村よしみ・加納千恵子 (1990)「新教材開発の経過報告ーモデル会話、会話ノート、会話ドリルを中心にー」『日本語教育論集』第5号 筑波大学留学生教育センター
- 9) Brumfit, C. (1984) *Communicative Methodology in Language Teaching*, Cambridge University

ty Press

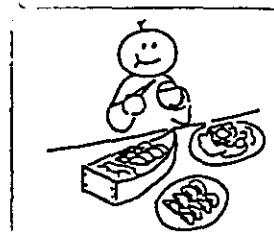
- 10) Keith, J. and Keith, M. (1984) 小笠原八重訳『コミュニカティブ・アプローチと英語教育』
桐原書店
- 11) Krashen, S. (1981) Second Language Aquisition and Second Language Learning. Pergamon
- 12) Nunan, D. (1989) Designing Tasks for the Communicative Classroom, Cambridge University Press

Tasks and activities

1. 1. あなたは旅行で、何をしている時が一番楽しいですか。



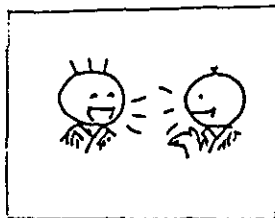
①きれいな景色をみる



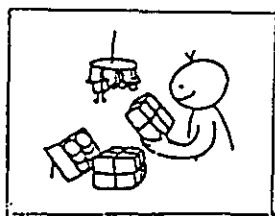
②おいしい料理を食べる



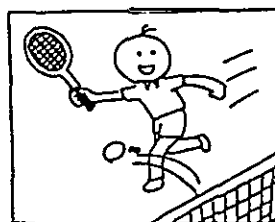
③温泉に入る



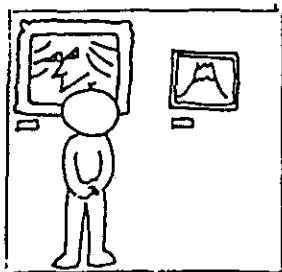
④部屋で友だちと話す



⑤おみやげを買う



⑥スポーツをする



⑦博物館や美術館へ行く

2. 高橋さん、鈴木さん、山田さん、吉田さんはいつが一番楽しいと言っていますか。テープを聞いて、上の番号を書きなさい。

1) 高橋 (②)	3) 山田 ()
2) 鈴木 ()	4) 吉田 ()

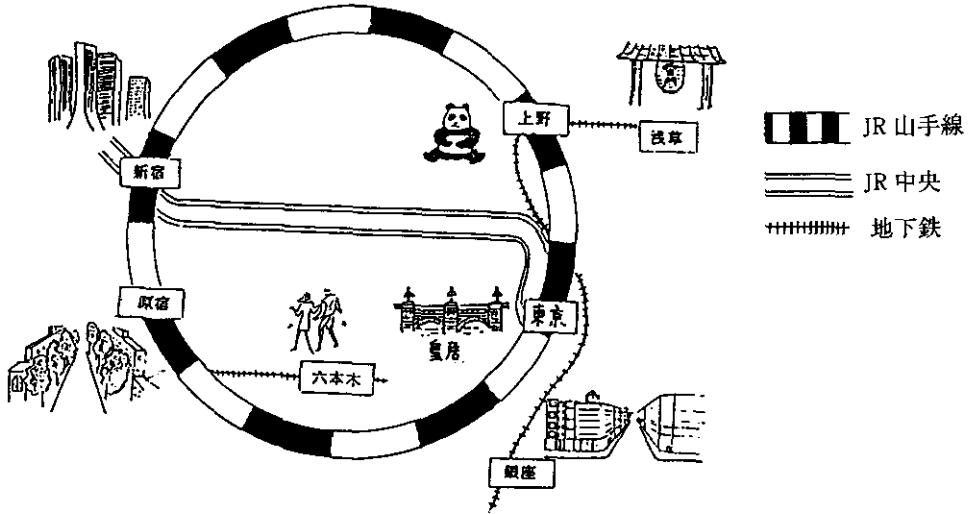
- ☆3. 下の表(ひょう：a chart)は、日本人が旅行に行って、したいことを表にしたものです。あなたは何がしたいですか。

あなたがしたい順(じゅん：order)に表に番号(ばんごう：number)を書いてください。

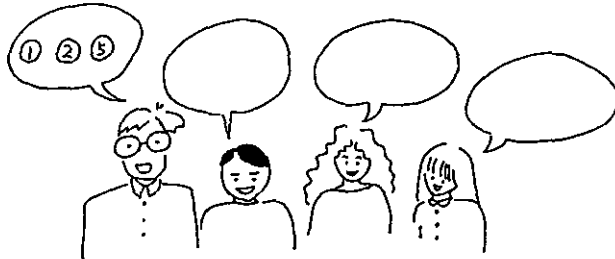
	昭和63年	あなたは
温泉に入りたい	52.3%	
きれいな景色を見たい	50.4%	
のんびり休みたい	45.8%	
おいしい料理を食べたり、買物をしたい	44.9%	
博物館や美術館へ行きたい	32.0%	
家族といっしょに休みたい	27.2%	
たくさんの人と楽しみたい	17.2%	
スポーツをしたい	13.6%	

2.

1. あなたは東京へ行ったことがありますか。東京のどこへ行きましたか。



☆2. スミスさんも国の友だちと東京へ行きたいと思っています。それで友だちにどこへ行ったことがあるか聞いてみました。トムさん、シンさん、ナンシーさん、リーさんはどこに行ったことがありますか。テープを聞いて数字を書きなさい。



- ①浅草 (あさくさ) ②上野 (うえの)
- ③六本木 (ろっぽんぎ) ④原宿 (はらじゅく)
- ⑤銀座 (ぎんざ) ⑥皇居 (こうきょ)
- ⑦新宿 (しんじゅく)

3. スミスさんは、1泊2日（いっぱくふつか：an overnight trip）の予定で東京へ行きます。最初の日（さいしよ ひ）に3か所（さんかしょ：3 places）、次の日（つぎ ひ）に2か所行くつもりです。

スミスさんは友だちにどんなコースがいいか聞きました。それから東京のホテルの値段（ねだん：a price）も聞いてみました。テープを聞いて、コースの順（じゅん：order）とホテルの宿泊代（しゅくはくだい：hotel charges）を書きなさい。

	コース		ホテルの宿泊代
山本さん	最初の日	こうきょ→はらじゆく→ろっほんぎ	¥ 7000 ~
	次の日	あさくさ→うえの →東京駅	¥15000
上田さん	最初の日	→ →	¥ ~
	次の日	→ →東京駅	¥
森さん	最初の日	→ →	¥ ~
	次の日	→ →東京駅	¥

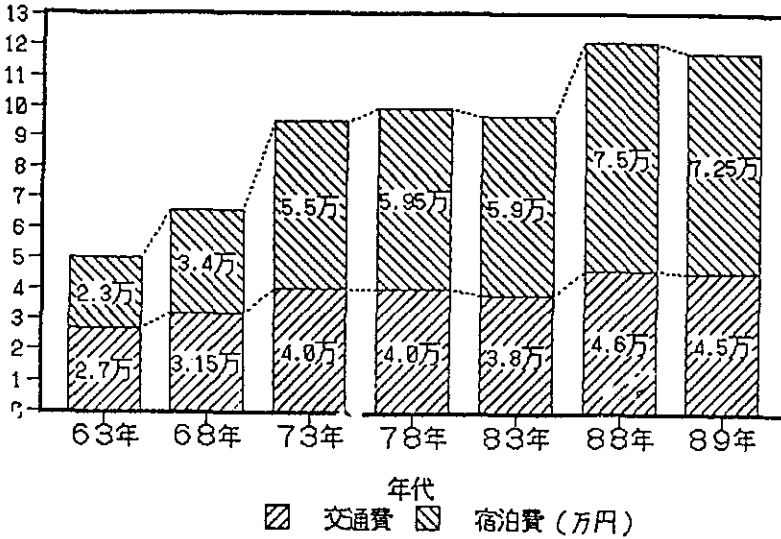
4. あなただったらどんなコースにしますか。ホテルの予算も決めなさい。

	場所	何をしますか
最初の日	①	
	↓	JR（中央線 山の手線）／地下鉄
	②	
	↓	JR（中央線 山の手線）／地下鉄
次の日	①	
	↓	JR（中央線 山の手線）／地下鉄
	②	
	↓	JR（中央線 山の手線）／地下鉄
	東京駅	

ホテル ¥ ()

3.

1. 下のグラフは日本人の一つの家族が1年間に旅行にかかった費用（ひよう：expenses）のグラフです。次の文は、何年のことを説明していますか。



交通費（こうつうひ：traffic expenses） 宿泊費（しゅくはくひ：hotel charges）

例 宿泊費より交通費のほうが、多い。 () 年

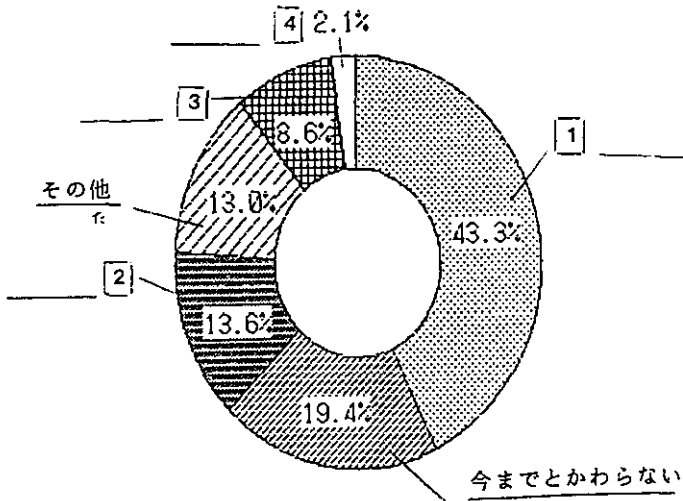
1 交通費は5年前と変わらないが、宿泊費がふえている。 () 年

2 5年前とくらべた交通費と宿泊費の増え方が一番大きい。 () 年

3 交通費も宿泊費も前の年より減っているが、1968年とくらべると宿泊費は3倍以上になっている。 () 年

☆2. 日本人の平均的な家庭の年収は、400万円から600万円とされています。1989年には、日本人の家庭は1年間に旅行に、117500円使ったということですが、あなたはそれが高いと思いますか、安いと思いますか。また、それはどうしてですか。

☆4. 下の円グラフは日本人が旅行についてこれからどうしたいかを示したグラフです。資料を読んでグラフの中の1～4はa～bのどれか考えてください。



- a 旅行回数を少なくして、それぞれの旅行日数も少なくしたい。
 b 旅行回数を少なくして、それぞれの旅行日数を多くしたい。
 c 旅行回数を多くして、それぞれの旅行日数も多くしたい。
 d 旅行回数を多くして、それぞれの旅行日数を少なくしたい。

(観光白書 平成2年度版より)

資料1

80%以上の方が、これから旅行したいと答えているが、実際に1年間に1泊以上の旅行をした人は49%だった。これは、労働時間が長すぎることに関係があるだろう。しかし、これからはできるだけ長く、そして、多く、旅行に行きたいと考えている人が50%近くもいる。特に若い人たちはこのように考えている人が多いようだ。

実際 (じっさい) actually

～泊 (はく)～ overnight staying

労働時間 (ろうどうじかん) working hours

できるだけ～ as～ as possible

特 (とく) に especially

資料2

これからもっと旅行に行きたいと思っている人は多いが、日本は労働時間が長くて、1年間にとれる休暇が短い。休暇の日数はこれから多くなっていくだろうが、その休暇の使い方について、短い日数でいろいろなところへ行くより、できるだけ長い日数でゆっくり過ごしたいと思っている人が多いようだ。

労働時間 (ろうどうじかん) working hours

休暇 (きゅうか) a vacation

日数 (にっすう) the number of days

資料3

これから旅行をしてみたいと思っている人は84%で、これからもっと旅行をしてみたいと思っている人が増えている。さらに、長期の旅行を「してみたいと思う」人は49.7%で、「してみたいと思うが、できない」人は30.7%と、70%以上の人が、旅行の日数を多くしたいと思っている。

長期 (ちようき) a long time

資料4

日本人は働きすぎているといわれるが、旅行に使う時間を少なくしたほうがいいと考えている人は5%以下に少なくなってきているということがわかった。これからも旅行したいと考えている人は、若い人が多くて、今後、旅行などに時間をを使う傾向は増えていきそうだ。

今後 (こんご) in future

傾向 (けいこう) tendency

* 1. 四人で一つのグループになって、それぞれ資料1～4のうち一つだけ読んで答える。

* 2. 二人で、ペアを組むときには、一人に資料1と2、もう一人に資料3と4を読ませて考えさせる。

テープ・スクリプト

1

S : ねえ、高橋さん、旅行好き。

高橋：うん、好きだよ。

S : 何をしている時が一番楽しい。

高橋：そうだなあ。おいしい料理を食べている時かな。

S : 高橋さん、よく食べるもんね。

高橋：そう、おいしいものを食べると、ああ、よかったって思うんだよね。

S : あら、鈴木さん、何見てるの。

鈴木：旅行のパンフレット。こんどの休みにね、どこかへ行こうと思って。

S : 旅行か。いいなあ。

鈴木：ゆっくり温泉に入ったりしてね。

S : ああ、いいね。

鈴木：きれいな山とか、海とかをみている時って最高だよな。

S : そうね。私もどこかに行きたいな。

山田：こんどね、みんなで旅行に行くんだけど。

S : へえ、山田さんも行くの。

山田：うん。それで、どこかいいホテル知らない。

S : そうだなあ。何人で行くの。

山田：4人。旅行ってさ、友だちといっしょに行く時って.....

S : 夜、みんなでお酒を飲む時が一番いいでしょ。

山田：ちがう、ちがう、いろいろ話す時が一番いいのよ。

S : へえ。

山田：いつもは話さない話とかね。

S : こんど沖縄へ行くんだって。

吉田：そうなんだ。5日間なんだけどね、泳ごうと思ってさ。

S : そう、あそこはゴルフやテニスもできるわよね。

吉田：うん、スポーツしてる時が一番だよ。

きれいな青い海で一日中泳ぎたいなあ。

S : 吉田さん、スポーツ好きだもんね。でも、おみやげも忘れないでよ。

吉田：わかってるよ。何がいい。

S : 食べ物かな。旅行って、おみやげ買うのも楽しいのよね。

II 2)

S : こんど東京へ行きたいと思っているんだけど。

トム : ああ、東京はおもしろいところがたくさんあるよね。

S : トム君、どこへ行ったことがある。

トム : ぼくは上野へ行ったことがあるよ。

S : ああ上野。

トム : それから浅草へも行ったことがある。

あそこはね、浅草寺っていう古いお寺があって、
その近くにおみやげの店がたくさんあっておもしろいよ。

S : それから？

トム : ええと、銀座にも行ったことがあるけど、夜だったから
デパートや店は閉まっていたよ。

S : シンさん、こんど東京へ行きたいと思っているんですけど、
新宿へ行ったことがありますか。

シン : 新宿はないけど、原宿へ行ったことはありますよ。

S : どうでしたか。

シン : 近くに竹下通りというところがあって、
そこで安い服をたくさん買ったんです。

S : そうですか。ショッピングもできるんですね。

シン : ええ、近くにある代々木公園や明治神宮は、静かでいいところですよ。
それから六本木にも行ったことがありますよ。

S : ああ、あそこはディスコがたくさんあるでしょ。

シン : ええ、わたしも行きましたよ。

S : こんど東京へ行きたいと思っているんだけど。

ナツ : ああ、そう。わたしも銀座へ行ったことがあるわよ。

S : そう、銀座は有名だね。池田さんもやっぱりショッピングしたの。

ナツ : うん、ちょっと高かったけどね。それから私、歌舞伎も見たの。

S : え、歌舞伎。

ナツ : 歌舞伎座が近くにあるのよ。

S : そう、ほかには。

ナツ : あとは皇居にも行ったことがあるわよ。

静かな公園のようなところだったわ。

S : リーさん、こんど東京へ行きたいと思っているんだけど。

どこへ行ったことがある。

リー : 新宿と上野へ行ったことがあるし、それから……

S : ああ、上野。どうだった。

リー : うん、美術館とか博物館とかがあって、おもしろかった。

S : 新宿は。

リー : 夜、高層ビルから夜景を見たんだけど、きれいだった。それから、
原宿へも行ったことがあるけど。

S : やっぱりショッピング。

リー : ううん、私は喫茶店でお茶を飲んだの。あそこはきれいなレストランや喫茶店が
たくさんあるから、入ってみるといいわよ。

S : そう。

II 3)

1 山本 : まず、皇居へ行って、1時間半ぐらいでだいたい見られるから……

S : はい。

山本 : それから、山手線に乗って、次に原宿に行ったらどうですか。

S : 近いんですか。

山本 : えっと、30分ぐらいかかると思います。それから夜は六本木へ
行ってみたらどうですか。

S : 六本木もおもしろそうですね。あのうホテルはいくらぐらいですか。

山本 : そうだな。7000円ぐらいから……15000円ぐらいかな。

S : 15000円かあ、高いんですね。

山本 : ええ、東京は高いですよ。えっと、次の日は、まず浅草に行って、
いろいろ見てから上野へ行ってみるのがいいんじゃないですか。

S : 浅草から上野までは山手線で行けますか。

山本 : いいえ、地下鉄です。上野から東京駅へは山手線で行けますよ。

S : そうですか。

2 上田 : そうねえ、まず新宿に行って、次に原宿へ行くのがいいと思うけど。
東京駅から中央線だと、新宿まで15分ぐらいだし、新宿から原宿も
山手線であまり遠くないわよ。

S : 15分かあ、近いんだね。

上田 : ショッピングもたくさんできるわよ。原宿で昼ごはんを食べたらいいと思うけど。

S : ふうん、それからどこがいい？

上田 : それから銀座へ行ってみたら。やっぱり有名だし、たくさんお店もあるし・・・銀座へも山手線で行けるわよ。

S : なんだか、ショッピングが多いコースだね。

上田 : あら、じゃあ次の日は上野へ行って美術館や博物館をみたらいいじゃない。それから皇居へ行ってみるっていうコースもいいと思うけど。皇居は東京駅からも近いから次の日山手線を使えばいいし。

S : なるほどね。ところで、東京のホテルっていくらぐらい？

上田 : そうね。9000円から高いところだと20000円ぐらいじゃないかな。

S : ええ！20000円、それは高すぎるよ。9000円だって高いよ。

3 森 : 東京へ行くんだったら、やっぱり、まず上野へ行って・・・

S : 美術館や博物館を見たりして？

森 : そうそう、次に浅草へ行ってみたら。あそこはおみやげの店もたくさんあるし浅草寺もおもしろいと思うよ。

S : 上野から浅草は地下鉄でしょ。

森 : そうだね。地下鉄で行ったほうがいいと思うよ。それから、最初の日の最後は新宿へ行って夜景を見たらいいんじゃないかな。上野から山手線で行けるよ。

S : 新宿の夜景かあ。東京のホテルっていくらぐらいかな。

森 : たぶん6000円ぐらいから15000円ぐらいだと思うけど。

S : 6000円ぐらいでもあるのか。

森 : うん、探せばあると思うよ。それから次の日はまず銀座へ行って、それから山手線で皇居へ行くっていうコースがいいと思うけどどうかな。皇居は東京駅から歩いて行けるし。